コンゴ革命

院生共闘

3月24日，ラオス，カンボジア，そしてブラジルでの革命的昂揚が伝えられるなかで，コンゴ（ブラザビル）でのクーデター失敗が報ぜられていた。曰く「23日，コンゴ（ブラザビル）でクーデターが起きたが，すぐ政府側によって鎮圧された。」「クーデター部隊の指導者は，1968年のクーデターに失敗して以来国外に逃げていたキカンガ中尉とわかった。」そして，「政府軍は機銃掃射を浴びせ，キカンガ中尉は射殺され，死体が街頭でさらしものにされた。エングアビ大統領は放送局を包囲した政府軍を軍服姿で指揮し，数千人の群衆は，街頭を赤旗を振って行進，エングアビ政権への支持を表明した。」沖縄をめぐる闘争の高揚を前に，アジアの情勢は，71年韓国大統領選挙を焦点とする朝鮮危機と3月初め以来のベトナム革命の全アジアへの勝利的拡大によって特徴づけられることになろう。アジアにおける革命情勢の勝利的前進は，プロレタリア世界革命の重要な一翼であることはいうまでもないことだが，ここにアフリカにおける民族解放闘争の典型的な勝利の戦いとして，コンゴの革命情勢の一端を紹介したい。コンゴ（ブラザビル）は，1960年フランスから独立，63年クーデターののち，昨年には国名，コンゴ共和国をコンゴ人民共和国と改ため，インターナショナルを国歌に採用し，マルクス，レーニン主義を指導原則としている国である。コンゴ人民共和国は，1484年にポルトガル人に発見されて以来，17世紀にはフランスの侵入により奴隷や象牙の売買地にされ，1885年にフランスの植民地にされ，そして1910年フランス領赤道アフリカに編入されていた。60年フランスからの独立をとげるが，その際のユールー政権は，カソリックの神父でありながら町々に妾を置くような破戒僧ユールーによるものであり，フランスの傀儡政権でししかなかった。そして現在のコンゴは，ユールー大統領を軍のクーデターで63年打倒した後に，コンゴ人民が自からの力で被抑圧に訣別を告げたところに生れたものである。1963年8月15日に，ブラザビルで労組・青年たちがユールー政権打倒のストとデモを行なったわけだが，この闘いは人民の闘いが民族民主革命の方向をとる前に，その成果を軍のクーデターによってさらわれるという，アフリカ大陸にそれまで共通していた数多くの闘いのパターンを破るものであった。この事の最大の理由は，アフリカ社会には階級闘争がなく，平和的に社会主義に移行できるといったソ連修正主義の指導を退けて，キューバ・中国の指導を受けながら，軍隊の若い下級将校の協力もあって，青年組織がただちに武装したというところにあった。

コンゴの労働者階級は少数者でしかなく，プロレタリアートとしての意識も歴史も浅く，ほとんどが農村出身者である。そして，農林業を中心にしたコンゴに階級闘争を喚起させたものは，フランス植民地主義であった。植民地主義は，経済を発展させず，上部構造を下部構造に不釣合に大きなものにさせていた。この為に，63年の独立後にも国家機構の重要部分をなす官僚制度がブルジョアジーを生み出す手段になっていた。このような官僚は，いまだ巣食っていた氏族制度を通して農村を支配し，国家を掠奪していたのである。フランス植民地主義はそればかりでなく，反植民地主義の原動力となる，都市と産業の発展下の氏族の融和混合を避ける必要からも，経済の発展を押えようとしていた。

60年の独立で，フランスに一定の譲歩をさせたコンゴ人民の次の闘いは，農村においては氏族の支配的家族と闘い，国家的には部族的官僚主義と闘うことであった。このような闘いは，「革命民族運動」とソ連とも結びついていた官僚ブルジョアジーとの連合によって勝利を得ていたが，官僚ブルジョアジーが革命民族運動の壊滅を図ろうとしたのは当然であった。かくてそれ自体は敗北したが，66年6月反革命クーデターが起された。しかし，この際革命派も潜行を余儀なくされていた。この反革命を教訓に，革命派はゲバラの軍人から勇敢に闘うこと，そして毛沢東の著作からイデオロギー的武装を一層整えていった。革命的青年組織と将校との同盟は，コンゴ労働党を組織しながら，部族官僚主義に闘いを挑み，68年5月30日の革命を成功させていた。この革命の勝利は，新植民地主義にとりかこまれた若い小国，コンゴ人民共和国がはっきり西アフリカ地域の解放をめざす闘いに，アフリカにおいて展開される階級闘争の勝利の展望をもつ唯一の砦としての役割を示しているものであり，先日の反革命クーデターを粉砕していったのであるといえよう。